

---

# エリザ・シドモア(Eliza Scidmore)の“The Famous Gardens of Kyoto”を通じた

## 無鄰菴庭園の本質的価値の再検証

Reinvestigating Murin-an Garden's Intrinsic Value Through Eliza Scidmore's  
“The Famous Gardens of Kyoto”

マイケル・シャピロ<sup>1</sup>・小椋菜美<sup>1,2</sup>・加藤友規<sup>1,3</sup>

Michael Shapiro, Nami Ogura, Tomoki Kato

<sup>1</sup>植彌加藤造園株式会社、<sup>2</sup>京都大学、<sup>3</sup>京都芸術大学

<sup>1</sup>Ueyakato Landscape Co., Ltd., <sup>2</sup>Kyoto University, <sup>3</sup>Kyoto University of the Arts

Key Words : (邦文) 1.無鄰菴 2.本質的価値 3.野原  
(欧文) 1.Murin-an 2.Intrinsic value 3.Wild moor

---

### 1. 植治が作庭した未知の庭園の特定・無鄰菴庭園の本質的価値の再検証

今年の日本庭園学会全国大会では、アメリカの女性ライター、エリザ・シドモアが明治45(1912)年に“The Famous Gardens of Kyoto”という記事を紹介した。特に彼女がその記事の掲載先となった‘The Century’誌の編集長であるロバート・アンダーウッド・ジョンソン(Robert Underwood Johnson)と交わした手紙に焦点を当て、この記事の執筆背景を解明することによって、当時の外国人がどのように日本庭園を認識していたのかを探った<sup>1</sup>。

本発表ではその研究成果を踏まえつつ、シドモアの記事の内容を更に分析し、無鄰菴庭園の本質的価値を再検証する。特に「野原(wild moor)」というキーワードに着目し、七代目小川治兵衛(植治)が作庭した国の名勝である無鄰菴とこれまで彼の作庭とは知られていなかった庭園の記述を比べることにより、植治が認識していた無鄰菴の本質的価値をシドモアの記事が間接的に示している可能性を検討したい。

### 2. 全国大会の発表の振り返り

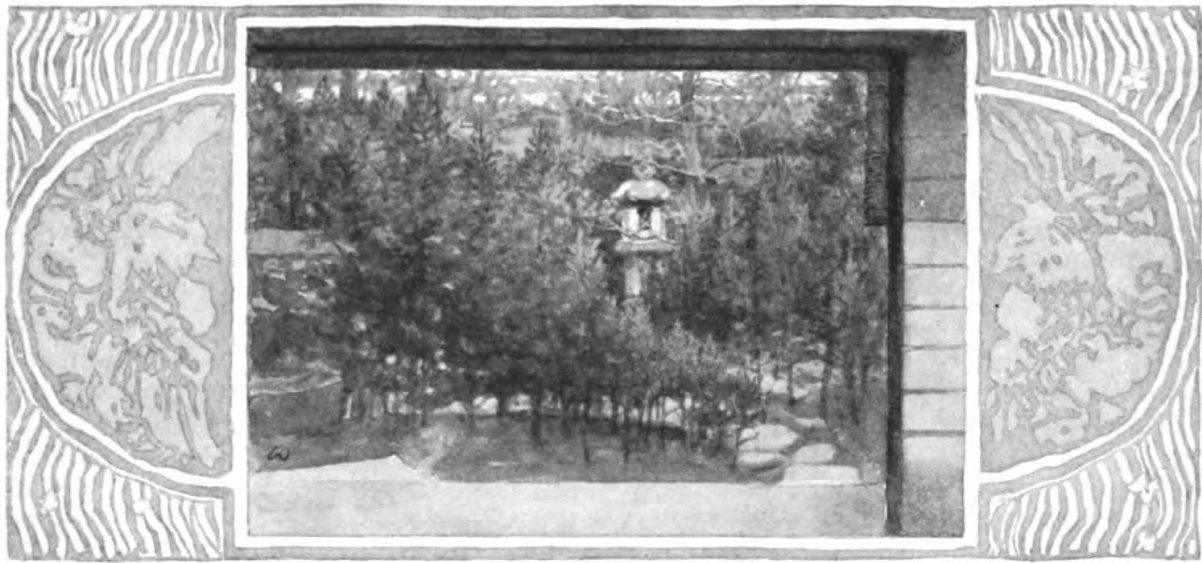
全国大会での発表では、1910年5月6日～1911年10月4日の間にシドモアとジョンソンがやり取りした書簡

9通を読み解いた結果、明治末期の京都において古庭園を所有し、改修するブームが起こったことが明らかになった。加えて、シドモアの原稿執筆のモチベーションとして、明治42(1909)年に京都で開催された第三回全国園芸大会に彼女が参加した可能性が示唆された。また、この記事の執筆するに当たり、当時活躍を広げていた植治に密着取材を行っていたことを明らかにした。

### 3. 植治が作庭した未知の2庭園の特定

全国大会でも紹介した通り、シドモアの記事には植治が作庭した庭園が四つ紹介されており、「無鄰菴」や「對龍山荘」という、現在でも大変有名な庭も含まれているが、これまで植治の作庭とは知られていなかった2庭園も掲載されている。全国大会の時点ではまだ特定できていなかったこれらの庭園の詳細をここで明らかにしたい。

まずはシドモアが「小杉の庭」と呼んだ庭から説明していきたい。この庭園についてシドモアは次のように記述している。「最も賑やかな呉服屋街にある絹織物商は、おそらく12×20フィートの広さの中庭に有名な「小杉の庭」を持っている。森に覆われた丘陵が重なり合い、その間からはそのような渓谷につきものの集落へと続くような石敷きの小道が見える。全体は若い杉の木で構成され、最も小さいものは高さ3フィートにも満たないが、

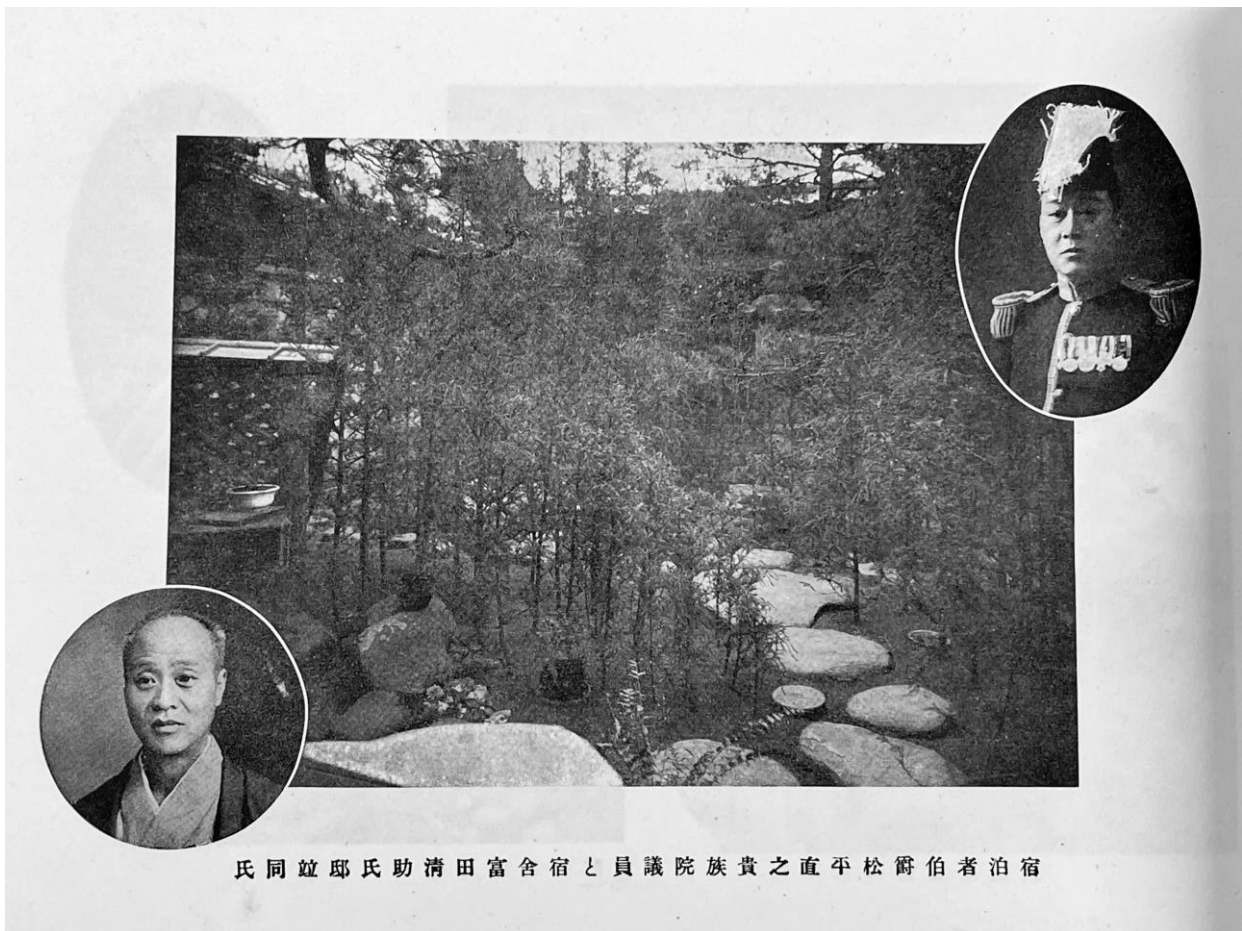


Drawn by C. D. Weldon. Half-tone plate engraved by R. Varley

THE "GARDEN OF LITTLE CRYPTOMERIA-TREES"

This is in the court of a silk merchant's house in the down-town dry-goods quarter. The court measures about twelve by twenty feet, yet the garden makes the suggestion of overlapping spurs and forested mountain-slopes in nature's wildest retreats.

図 1 The Garden of Little Cryptomeria Trees ("The Famous Gardens of Kioto")より



氏同竝邸氏助清田富含宿と員議院族貴之直平松爵伯者泊宿

図 2 富田清助氏邸 『御大禮記念寫眞帖』より

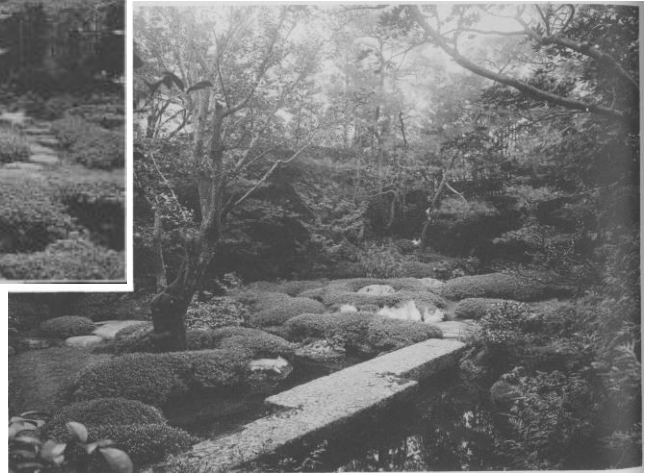


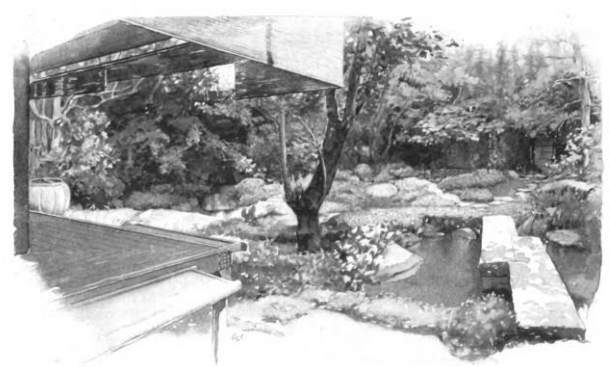
図 3 内貴氏林泉 『泉石雅観』より



泉林氏貴内  
The garden of J. Naiki Esq.

図 4 内貴氏林泉 『京華林泉帖』より

それらは森の斜面の巨木のように互いの背後に均等にそびえ立っている。完璧な錯視である<sup>ii</sup>」としている。限られた空間の中で大自然を感じさせる風景が展開されていることを強調している点は注目に値しよう。この「小杉に覆われた山の溪谷を思わせる庭園」はどこにあったのだろうか。実は、大正 4(1915)年に京都で行われた大正天皇即位大礼(御大典)を記念して刊行された『御大禮記念寫眞帖』にはこの庭園によく似た庭が掲載されている<sup>iii</sup>。即位式の際に貴族議員松平直之の宿泊先となった、「富田清助氏邸」の庭である。前項に示した“The



Drawn by C. B. Weldon. Half-tone plate engraved by G. M. Lewis

A “WILD MOOR” GARDEN

This garden is at the rear of a silk merchant's house in the heart of the business quarter. Although the ground space measures not more than fifty feet square, the garden gives an impression of great distance and space.

図 5 A Wild Moor Garden

(*The Famous Gardens of Kyoto*)より

Famous Gardens of Kyoto” (図 1)と『御大禮記念寫眞帖』(図 2)を比較してみると、角度の差こそあれ、いずれも高さが緻密に調整された樹木が飛石の両脇に植えられ、背後に高木と大きな石燈籠が見えるなど酷似している。飛石の配置等からもこれらは同一の庭園であると考えられる。

それでは、シドモアが植治の作庭として紹介しているもう一つの庭“A Wild Moor Garden”はどこにあったのだろうか。この庭についてシドモアは「ビジネス街の中心にある絹織物商の家の裏手」にあるとし、「敷地面積



図 6 無鄰菴庭園 (2018年撮影)

は50フィート四方にも満たないが、庭は遠くまで見通せるような広々とした印象を与える<sup>iv</sup>」とやはり小さい空間の中で広いスケール感を実現できている点を強調している。“The Famous Gardens of Kyoto”に掲載されたこの庭の挿絵(図5)を大正11年に刊行された『泉石雅観』<sup>v</sup>に掲載されている「内貴氏林泉」(図3右側)と比較した。角度の差はあるが、どちらも同じ形の石橋と樹木を写しているため、同一の庭である可能性が高いことが分かる。『泉石雅観』に掲載されている「内貴氏林泉」のもう一つの写真(図3左側)を第三回全国園芸大会に合わせて刊行された『京華林泉帖』<sup>i</sup>の写真(図4)と比較すると、この芝生の向こう側に細長い流れが存在したことが分かる。この点は、次節で「内貴氏林泉」を無鄰菴と比較する際に重要になる。

シドモアが「絹商」として紹介した内貴甚三郎(1848-1926)は、確かに絹商を営む商家の出身ではあったが、初代京都市長を務めた人物として知名度が最も高いだろう。特に将来の百万都市を想定した地域別の開発構想を提案したことが有名だが、そのなかで「東方ハ風致

保存ノ必要アリ」と位置づけたことによって、南禅寺界隈の別荘地化を促した<sup>vii</sup>。このような内貴甚三郎が植治に作庭を依頼していたこと自体も十分注目するに値すると思うが、それは今後の研究課題とし、次節ではこの内貴氏林泉と無鄰菴についてのシドモアの記述を比較し、無鄰菴の本質的価値を再検証してみることにしたい。

#### 4. 無鄰菴の本質的価値

##### (1) 芝生の再検証

“The Famous Gardens of Kyoto”ではシドモアは無鄰菴について次のように記述している。「山縣公の無鄰菴は、1エーカーにも満たない広さだが、元帥、歌人、茶人である彼は、遠く離れた山腹にあるかのように見える松、楓、杉の原野に囲まれた、静かに轟く滝から流れ、曲がりくねった小川が横切る小さな野原を眺める幸せを持っているのである<sup>viii</sup>。」この引用文でまず注目すべきは、シドモアが無鄰菴の小ささを強調している点である。

同じところに南禅寺界隈に作られ、その後に植治が改造した對龍山荘について、シドモアは「4エーカーの敷地内



図 7 写真帳『無鄰菴』より

に40エーカーほどの公園のような造園美が込められている<sup>ix</sup>」と評価しているが、つまり「1エーカーにも満たない」無鄰菴の4倍以上の大きさがあると彼女は認識しており、この二つの庭園の間に重要な差があると考えていたことがうかがえる。

そして、シドモアが無鄰菴の風景を説明する際に「野原(wild moor)」というキーワードにこだわっている点も重要である。植治についてシドモアは「野原がこの造園の達人のお気に入りのテーマであり、京都にはこの種の庭として最高の例が二つある。このような小さな野原において人の技巧は全く隠され、努力や作意の跡は完全に消される<sup>x</sup>」と説明しているが、以上の引用文からも分かる通り、その「最高の例」の一つは無鄰菴である。そして、もう一つの例はシドモアが「野原の庭(“wild moor garden”)」と名付けた「内貴氏林泉」である。彼女はこの庭園について次のように書いている。「ビジネス街の中心にある絹織物商の家では、先祖代々の奥庭を拡張して50平方メートルとし、同じアーティスト(植治)が別の

寂しい野原を作り、この種の構成としてはもっとも成功を収めたのである。」シドモアは「内貴氏林泉」の特徴として「松と杉が茂った林の最奥にはお決まりの滝があり、ここから流れ出す小川は、陽射しの下に現れるとしばらく野原をかすめ、傾斜した岩の上を滑り、前景を横切り、右端にある花崗岩の橋がかかる池へと流れ込む」点を挙げている。高木の奥に隠れる滝や「野原」を回っていく細長い流れなど、先ほど紹介した無鄰菴の記述ともよく似ているといえよう。

そして、実際に無鄰菴の写真(図6)と「野原の庭(“wild moor garden”)」の挿絵(図5)を比較してみると、構成上の類似点が際立っていることが分かる。どちらも細長い流れが、野趣溢れる芝生(野原)に隠されながら、それを迂回して、石橋がかかった幅の広い水面へと広がるような構成となっている。改めて無鄰菴の本質的価値としての芝生の重要性を感じさせる比較である。

しかし、シドモアがこの類似性を自分で見出したとは考え難い。全国大会の発表では、シドモアが‘ザ・セン

チュリー’編集長ロバート・アンダーウッド・ジョンソンとやり取りした手紙の検討から、シドモアが明治43(1910)年の秋に植治に密着取材していたことを明らかにしたが、やはり「野原」の存在を無鄰菴と内貴氏林泉に共通する特徴と評価したのは植治自身だったと結論付けるのがもっとも妥当ではないだろうか。

これまで無鄰菴の本質的価値としての芝生を解明しようとする様々な研究<sup>ii</sup>が行われてきたが、シドモアの記事が間接的に植治の無鄰菴に対する認識を示唆しているなら、これまでの研究に新たな裏付けを与える文献であるといえよう。だが、同時にこの発見は新たな研究の可能性も示唆している。その一例として無鄰菴の芝生(野原)と月の景色との関係性を検討したい。

## (2) 芝生(野原)と「月」の検討

無鄰菴の施主であった山縣有朋が明治天皇から下賜された稚松を記念するために明治34(1901)年に無鄰菴の庭園内に建てた石碑には、「夏は川とのにすミわたる月の涼しさ」と詠んでいることはよく知られているが、この他には無鄰菴における月の景色についての文献は少ない。シドモアは無鄰菴からみた月について次のように説明している。「彼(山縣)のために月は東山の稜線の上に昇り、南禅寺に続く大きな松の木の枝の間から月光が射すと、野原には、そこまで運んで来たと思えないような、地中に半分埋まった岩が見えるのである。」

ここで「そこまで運ばれたと思えない、半分埋まった岩」とシドモアが言っているのは、山縣がわざわざ醍醐山から運んできた大石を含めた、庭の北側に据えられた景石のことを指すと考えられる。無鄰菴の古写真(図7)を見るとこれらの景石が目を引き存在だったことが分かる。彼女の説明によれば、無鄰菴における芝生(野原)は夜空の月によって照らされた景石を鑑賞する場所としての機能もあったということである。しかし、彼女が夜の無鄰菴を見ていたとは考えにくい。そう考えると、無鄰菴の野原のこの役割をシドモアに伝えたのも植治だったとみるのが最も自然であるように思われる。

ちなみにシドモアは「内貴氏林泉」の月の景色についても以下のような似通った説明をしている。「木々の間に石灯籠が隠れ、松の木の屏風越しに石塔がぼんやりと見える。荘厳な灯籠が灯され、森の奥の火の玉のような

姿を現すと、そしてさらに、この森の木々の頂に月が昇り、荒れた野原に銀の光が溢れると、詩と魔法は完成されるのである。」

## 5. 結び

以上、エリザ・シドモアの“The Famous Gardens of Kyoto”の内容を検討し、これまで七代目小川治兵衛の作庭とは知られていなかった二庭園を特定するとともに、その一つである内貴邸庭園を無鄰菴と比較することによって無鄰菴の本質的価値を再検証した。加えて、月の景色を見る場所としての野原の意味も検討した。今後はこの研究結果を裏付けつつ、英語文献から見た植治の作庭活動を更に解明していきたい。

## 脚注および引用文献

- <sup>i</sup> マイケル・シャピロ、小椋菜美、加藤友規 「英語文献による日本庭園史の研究：エリザ・シドモア(Eliza R. Scidmore)の“The Famous Gardens of Kyoto”(京都の名園)を中心に」『令和4年度日本庭園学会全国大会資料集』
- <sup>ii</sup> Scidmore, “The Famous Gardens of Kyoto,” *The Century* (April 1912), 815
- <sup>iii</sup> 『御大禮記念寫眞帖』第五巻(日本電報通信社、大正4(1915)年)61
- <sup>iv</sup> 同上、813
- <sup>v</sup> 上田傳三郎編、『泉石雅観』(城丹公論社、1922)
- <sup>vi</sup> 湯本文彦編、『京華林泉帖』(京都府廳、1909)
- <sup>vii</sup> 尼崎博正、「想像する伝統」中村一・尼崎博正共著『風景をつくる』(昭和堂、2001)170
- <sup>viii</sup> Scidmore, 815
- <sup>ix</sup> 同上、813
- <sup>x</sup> 同上、814
- <sup>xi</sup> 阪上富男・加藤友規ほか「野花の管理—無鄰菴庭園の価値性を尊重して—」『令和元年度日本庭園学会全国大会資料集』  
阪上富男・加藤友規ほか「名勝無鄰菴庭園における本質的価値の検証にもとづく植栽の育成管理」『ランドスケープ研究』Vol. 82 増刊 技術報告集, 44-49  
阪上富男・加藤友規ほか「名勝無鄰菴庭園における本質的価値としての野花を生かした芝生管理のあり方」『ランドスケープ研究』80(増刊)技術報告集9, 40-45  
鈴木誠・栗野隆・井之川若奈(2005): 山縣有朋の庭園観と椿山荘: ランドスケープ研究68(4), 346-349  
渡邊 美保子(2013)「山縣有朋の自然観と作庭観」『日本庭園学会誌』2013 巻27号、41-49

令和4年度日本庭園学会関西大会  
研究発表要旨集

日本庭園学会

令和4年(2022)11月5日(土)